

シリーズ第31話

## キズの治療



新城市民病院  
消化器科・外科  
診療部長 横井佳博

従来、傷の治療法として「傷は水に濡らしてはいけない」「かさぶたができるように乾かす」「傷口を消毒しなければいけない」「毎日ガーゼを取り替える」などが常識として言われてきました。

しかし、現在では創傷治療（傷の治り方の仕組み）の研究とガーゼや皮膚に代わる材料（被覆材、人工真皮）・薬剤の開発により、単に傷を治すだけでなく、いかに早く、きれいな傷跡にするかが研究され、次のように常識が変わってきました。

「傷口を乾燥させず、消毒で傷口の細胞を殺してしまわない治療法（湿潤療法）」。「この治療法で早い治療、痛みとの緩和と、きれいな傷跡を実現させるというものです。」

切り傷や擦り傷ができた場合

体は自力で回復しようとしていきます。消毒とガーゼは傷口を乾燥させ、頑張っている細胞の働きを殺してしまい、不完全な治り方である「かさぶた」を作ってしまう。そこで、傷を負

つたらまず砂などの汚れをきれいに水で洗い流すことと、消毒せずに傷口を乾燥させないことがポイントとなります。家庭などでは食品用ラップで傷口を覆うと良いでしょう。この治療法は特に擦り傷や切り傷に適していますが、咬み傷やギザギザの傷、血が止まらない、砂などで汚れた傷、患部が赤く熱を持って腫れてくる、痛みが増すなどの場合には必ず医療機関へ受診してください。

病院では傷口を乾燥させないためにポリウレタン、ハイドロコロイドやアルギン酸などから

成る被覆材（傷を覆うもの）が用いられています。今では市販でもハイドロコロイドの被覆材があります。

これらの被覆材は傷に密着し、乾燥から守ってくれます。毎日取り替える必要はありません。ガーゼのように治りかかった皮膚をはがして傷つけることも少なく、治療までの日数を短縮できます。あせも（汗疹）ができたり、体から出るヌルヌルの浸出液が我慢できないようでしたら、水で優しく洗っても大丈夫です。傷を擦らなければ入浴やシャワーも可能です。しだいに浸出液が少なくなりピンクでツルツルの皮膚になれば治った証拠です。

また、最近では火傷やひどい擦り傷などのような皮膚の一部や全部が欠損した傷を従来より



も早く綺麗でひきつれない治り方を実現させようと、人工真皮（コラーゲンなどで作った皮膚の一部となるもの）や細胞増殖因子のスプレー剤が使われています。これにより、個人差はありますが、従来よりも傷跡が赤く醜く（ケロイド状に）盛り上がりがないとの報告もあります。ただ、最新の治療を行っても完全に元の状態に戻すことはできません。また、傷は治ってから2〜3カ月は不安定で、約5〜6カ月すると安定してきます。この頃に傷跡が目立つようなら、手術により目立たなくすることを考えます。通常、本当に傷口が落ち着くには2〜3年はかかると考えられています。欧米では「傷は目と同様に扱う」と指導されています。傷には優しく接しましょう。また、お困りの際には病院に受診しましょう。